

妙安寺だより 311号

法華経の解説(1)

法華経28品には、何が説かれているのか？ 簡単に述べてみることにしましょう。

〔序品第一〕

釈尊は御歳72、中インドの都であるの東北方・において説法を開かれました。聴聞のために集まった大衆は、の悟りに入り、釈尊の十大弟子と呼ばれる（智慧第一）・（浄行第一）・（神通第一）・（解空第一）・（論議第一）・（多聞第一）・（説法第一）・（天眼第一）・（持戒第一）・（密行第一）の各尊者をはじめ、広く世間に名を知られている文殊・観世音・薬王・勇施・弥勒などの菩薩、天神地祇、摩竭提国の大王・大臣・宰相、一般の人々、竜王など何万という大群衆であった。

「無量義経」の法話を終えると、釈尊は瞑想に入った。すると天から花が降り、釈尊のから光明があふれ、あらゆる世界を照らし出した。これを見ていた弥勒が文殊にたずねた。

「これから何がおこるのでしょうか」

「弥勒よ、釈尊は今、私たちに『法華経』という大乘の教えを説こうとしておられる。だから合掌して待とうではないか」と。大衆は恭しく釈尊を礼拝し、説法の始まるのを待ち受けていました。

〈紀行 桜の花に魅せられて？〉

4月1～2日、京都の亀岡温泉において、日蓮宗新聞社OBの集まりがありました。この会は、例年1月6日に開催されておりましたが、今年は、桜の季節が良いということで、京都の奥座敷・亀岡を会場で開催されました。

案内状では、2日目には保津川下りの予定でしたが、幹事のH上人に「申し訳ないけども、保津川下りは、腰が冷えると困るので、トロッコ電車にしたい」と前もって連絡いたしました。

4月1日午後2時に京都駅に集合。娘と同伴にて出席。亀岡の湯の花温泉にて一泊。当日の宿泊者は、我々8人のグループ（ちなみに九州から5人が出席）のみでゆったりとした温泉と山菜料理を堪能することが出来ました。

翌2日、午前中は元新聞社社長・元宗務副総長のM上人の自坊を参拝した後、保津川下りへ。ところが前日の雨によって増水し、保津川下りは中止ということで全員トロッコ電車にて嵐山へ。

桜は、福岡は散り初めというのに、京都では残念ながら寒さのせいから5分咲きから7分咲きぐらいで、時期的にははずれ。

桜と紅葉の季節は、暑さ寒さに左右されるので、予定は非常に難しいものです。

嵐山で、豆腐料理の昼食で、現地解散。もう一泊する予定でしたが、時期的にホテルの予約は満杯で取れずに帰福。

